

「タヌキさんがやって来た。」

タヌキさん

高橋久美子

高橋今日子

看護師

●

舞台は高橋久美子が入院している、巨大病院の病室である。

病室は12階に位置し、街並みが一望できる。

病室から外を見ている久美子。

リングゴを剥いている姉の今日子。

久美子 天気、いいねえ。

今日子 ……。

久美子 外に出てみたいな。きっと、気持ちいいんだろうな。私の分まで吸

い込んでね。春の空気。

今日子 そうする。

久美子 でも、ただの空気なのに、なんで季節でそのにおいが違うんだろ。

春には春の、夏には夏の、秋には秋のにおいがあるでしょ？冬には冬の匂いがあつて。

今日子 春が好きなの？

久美子 うん。だけど・・・私に届くにおいと、私じゃない誰かに届くにお

いって、同じにおいなのかな？それとも、微妙に違うのかな？

嗅覚って、生まれ育った環境で変わるんだって。前にテレビで観たことがある。だから日本人がいいにおいだと思っても、外国の人に

は、不快に感じるものもあるって。

久美子 例えばどんなにおい？

今日子 鯉節とか、松茸とか。ヨーロッパの人には、悪臭になっちゃうみた

久美子 ふうん。

今日子 でもそうだよねえ。人はいったい、同じにおいを感じているのか。

久美子 時々そんなことを思うんだ。全然違っていたらどうしようとかね。でも仮に違っていても、それを確認できないよね。

久美子 私は私以外の別の人にはなれない・・・ねえ。
今日子 なに？

久美子 旦那さんと結婚する前、何人の人と付き合った？何人？

今日子 そうだなあ・・・3人くらいかな。

久美子 くらいって？

今日子 付き合ったのか、付き合っただけじゃなかったのか、微妙な人もいて。

久美子 どうして別れたの？

今日子 そりゃ価値観が合わなかったり。

久美子 例えばどんな？

今日子 ・・例えば、すごく疲れていて、駅からタクシー乗っちゃおう！

って思ったとするでしょ。そういうとき、いや、こんな贅沢はしたら

ダメでしょ、とか言われたり・・・

久美子 そういうこと？価値観の違いって。

今日子 あ、だから、例えばさ、家族の誕生日だから、そっちを優先するね

って言ったなら、突然、不機嫌になったり。

久美子 別れて正解だよ。

今日子 あくまで例え話だよ。

久美子 いいって、嘘つかなくって。

今日子 ・・あ、うん・・・

久美子 そっか。じゃあ旦那さんとは合うんだね。そういう価値観が。

今日子 喧嘩もするけど、だけど一緒にいて楽なんだよね、やっぱり。

久美子 愛か。それが愛なのか。

今日子 曖昧だなあ、そういうのって。

久美子 いいの？そんな曖昧で。

今日子 私くらいぼんやりしているくらいがちやうどいいのかも。

久美子 儂いものよのう。

今日子 儂い？

久美子 関係っていうのは、いとも簡単に、終わったり、壊れたり・・・

今日子 死ぬまで愛し合う夫婦だっているよ。

久美子 でも、必ずどちらかが先に死ぬよ。その瞬間からは、ひとりぼっち

今日子 でも亡くなったって、心の中に、いる。

久美子 心の中にいる・・・か。

今日子 ・・。

久美子 お母さんも？

今日子 もちろん。

久美子 あんまり覚えてないからなあ、私。

今日子 私たちを見てくれているんだよ。コウタが産まれたときも「よかつたねえ」って。

久美子 優しくなった？コウタ産まれて。

今日子 そんなことないよ。いつもイライラしているし、振り回されてばかりだし、自分のやりたいことなんて何もできないし、ご飯の後は、

そこらじゅうに、食べかすが散らかっているし。

でも、そういうすべてが、お姉ちゃんの身体を満たすのかも。

今日子 子供は遠慮がないから。

久美子 母親か・・・私には想像もできない。

今日子 私だって・まさか自分が母親になるだなんて、今でも時々不思議。

久美子 お母さんのこと話してよ。

今日子 熱が出たときね、とびきりおいしいうどんを作ってくれたな。

久美子 ふーん。

今日子 幼稚園の頃、パンツはいたままプールで泳いでいたら、笑いながら

「パンツは脱いで水着は着るのよ」って・・・

久美子 ……記憶と記録って何が違うんだろ。記録は写真とか、ビデオと

か？・・・記憶は・・・

今日子 頭の中に残る、私の頭の中に。

久美子 記憶はいつかなくなるもの。その形は、常に変化する。

今日子 だけど、記憶は、記録以上に鮮明に思い出されることもあるんじゃない。

例えば、ラジオから流れる音楽、夕方の町に漂うにおい、ふ

と語られる言葉、そういうものがきっかけで、思い出されるもの。

自分の心を揺さぶるの。

この瞬間もどこかに残る？お姉ちゃんの記憶の中に。

今日子 もちろん。

久美子 だけど忘れるよね。

今日子 それは未来の私にしか分からない。

久美子 そうだよね。忘れないと、新しいことは入ってこない。

今日子 何だか、難しい哲学のお話しをしているみたい。

久美子 私はただ、私のことが、世界のどこに残るものか興味があるだけ。

今日子 ……。

久美子 お母さん、私がコウタくらいの時に亡くなったんだね。

今日子 うん。

久美子 ってことは、コウタも、今のこと、みんな忘れちゃうのかな。

今日子 どうかなあ。覚えていることもあるでしょ。

久美子 私もひとつだけなら。

今日子 どんな記憶？

久美子

・・・花火大会の帰り、橋の上から身を乗り出して川を覗いていたら、履いていた下駄が脱げて川へ落ちちゃったの。下駄がすーっと、闇に吸い込まれていった。あー、と思っているうちに、下駄はどこかへ消えてしまったの。

今日子

・・・。

久美子

覚えていない？前にお父さんに聞いたら、筑波の大学に勤めていた頃、そんなことがあったって。お母さんが亡くなる前、家族みんなで出かけたみたい。だから、あの川を覗いていた私の後ろには、亡くなる直前のお母さんがいたんだ・・・お母さん、下駄をなくした私に何て言ったのかな。「ダメじゃない」とか、「あーあー」とか、言ったのかな。え？覚えてないの？

今日子

・・・うーん、何となく・・・

久美子

もう・・・

今日子

ちよつと、コウタ見てくるわ。

久美子

ああ、うん。すっかりアイドルだね、コウタ。

今日子

・・・

と言いながら、カーテンの向こう側に消える。

どこからか、男がすーっとやってくる。

いわゆる浮浪者と呼ばれる男だ。

久美子、男に気づく。

久美子 (驚いて) 誰？

タヌキ はい？

久美子 誰？

タヌキ 私ですか。

久美子 ええ。

タヌキ シノザキです。

久美子 シノザキさん？

タヌキ 突然、すみません。

久美子 どちらのシノザキさんですか？

タヌキ 怪しいものじゃ、ありませんから。

久美子 怪しいですけど。

タヌキさんがやって来た。

タヌキ　　そうですか？

久美子　　ええ、十分。私に何か用？

タヌキ　　すいません。驚かせるようなまねをして。

久美子　　驚きました。

タヌキ　　迷ったんですよ、私も。こんな勝手なまねをして、果たして許してもらえるかなって。

久美子　　はあ。

タヌキ　　でも、これには訳がありました。

久美子　　どんな訳ですか？

タヌキ　　まあ、その辺はゆっくりとお話します。とりあえず、イカでも焼きましようか。

久美子　　イカ？

タヌキ　　ええ、

久美子　　でもどうやって？

タヌキ　　七輪、持ってきました。

久美子　　七輪？

タヌキ　　お嫌いですか、イカ。

久美子　　嫌いじゃないけど、今はちよつと・・・

タヌキ　　どうして？

久美子　　それに、こんな狭い部屋で焼いたら、病院中に、においませんか。

タヌキ　　そうか、そうですよね。

久美子　　ええ、きつとそう。

タヌキ　　じゃあ、他に何か焼くものって、ありませんか。

久美子　　他って？

タヌキ　　秋刀魚とか、ハマグリとか、

久美子　　海のものが、好きなのね。

タヌキ　　何でわかったんですか？

久美子　　とにかく、今、ここで何か焼くのはやめませんか。

タヌキ　　そうですか。残念だなあ。

久美子　　お茶でもどうですか。

タヌキ　　お茶ね。

久美子　　いれましようか。

タヌキ　　私がいれます。せめて、このくらいやらせてください。

久美子　　そうですか。

タヌキ　　どうぞ、座っててください。

久美子　　わかりました。じゃあ、お願いします。

タヌキさんがやって来た。

タヌキ 分かりました。

タヌキ、お茶を入れはじめ。

タヌキ もうどのくらいなんですか？入院されて。

久美子 （はっとして振り返り）もう9ヶ月になっちゃいます。

タヌキ そうですか。

久美子 ええ。

タヌキ 家は近いんですか。ここから。

久美子 車で30分くらいですかね。

タヌキ そうですか。

久美子 隣の町に住んでいます。

タヌキ 失礼ですけど、おいくつですか。

久美子 ……23歳です。

タヌキ お若いんですね。はい、お茶。（と久美子にお茶を渡そうとする）

久美子 私は…いま、お水しかダメだから。ゴメンナサイ。

タヌキ ああ、そうでしたか。

久美子 どうぞ、飲んで。あなたが。

タヌキ すいません。じゃ、お言葉に甘えて…

タヌキ、お茶を飲む。

タヌキ あ、肝心なことを訊くのを忘れていました。お名前、何とおっしゃるんですか。

久美子 名前、ですか。

タヌキ ええ。

久美子 高橋です。高橋、久美子。

タヌキ 久美子さんか。

久美子 ええ、高橋久美子。

タヌキ おっといけない。質問ばかりしてしまいました。

久美子 いいんです。

タヌキ もっと警戒されるかと思っていたんですが。いきなり私みたいなものが訪ねてきたりしたら。

久美子 警戒してないっていったら嘘になりますけど、でも、好奇心もわいてきたので、お相手する興味の方がちよつとだけ勝っちゃいました。

タヌキさんがやって来た。

タヌキ なるほど。

久美子 では、シノ、シノ、

タヌキ シノザキです。

久美子 シノザキさん。お話しを。

タヌキ はい？

久美子 ここに来た訳を。なぜあなたは、ここへ来たの？

タヌキ ここから何が見えます？

久美子 ああ・・・見てのとおり、街が見えます。学校、工場の煙突、行き

交う車、山、デパート、駅、図書館、グラウンド、野球場、公衆電
話、原っぱ・・・

タヌキ あそこに、公園が見えませんか。

久美子 公園？

タヌキ ええ、あそこ。

久美子 どこ？

タヌキ ほら、あそこ。

久美子 ああ、ありますね。公園。公園がどうかしたんですか。

タヌキ これを。

タヌキ、 双眼鏡を久美子に渡す。

タヌキ どうぞ、覗いてみてください。

久美子、 双眼鏡を覗き、

タヌキ 公園を見てください。

久美子 えーっと、公園、公園・・・ああ、見えました。公園。

タヌキ 何が見えますか？公園に。

久美子 犬を連れた老人、水の出ていない噴水、舗装された道・・・

タヌキ その先に・・・小屋のようなものがあるでしょ。青いシートに囲ま

れた、小屋のようなもの・・・

久美子 ああ、ありますね。

タヌキ はい。

久美子 あれはなに？

タヌキ いわゆる、ホームレスと呼ばれる人たちです。

久美子 ホームレス・・・

タヌキ あそこには、色々な人がいます。実にいろいろな人が。

タヌキさんがやって来た。

久美子　へー。

タヌキ　私はテツヤっていうんですが、あそこでは「タヌキ」って呼ばれていました。

久美子　タヌキさんか。

タヌキ　ええ。一応、あの公園のホームレスにも、ベテランというか、リーダーのような方がいますね、その人、クロマさんって名前なんです。クロマさんに最初に名前を訊かれたとき、なぜか口ごもっちゃったんですよ。したらクロマさん、「じゃあタヌキでいいや」って。どちらかって言えば、キツネじゃないですかって言うたら「名前なんてどうだっていいんだよ」って。それからタヌキ、タヌキって呼ばれてました。

久美子　タヌキさんか。じゃあ、タヌキさんは、あそこにお住まいだったんですね。

タヌキ　住んでいたというか、確かに住んではいたんですが、まあ色々複雑な事情がありました。

久美子　それでなぜ私のことを？

タヌキ　不快に思われるかもしれませんが、ここまで来た以上、告白しますと、私、毎日あそこから、こいつでこの病院の窓を見るのが日課でした。駅前の量販店で498円で売っていたものですが、これが意外によく見えるんです。そしたら、あなたに出会った。窓の外を見ているあなたが発見した。別にその、変な意味じゃなくて、その、あなたが気になった。それからというものは毎日、こいつでああなたの姿を見ながら、会話を楽しむようになった。「おはよう」「調子はどうだい」「もうスグ昼食の時間だね」「もう夕方だね」「おやすみ」「また明日も会いましょう」

久美子　・・・

タヌキ　ごめんなさい。気持ち悪いですよ。こんな人。

久美子　・・・

タヌキ　ただ見ているだけじゃと思って、ここに記録も残してきました。いつかあなたの役にたつかも思わないと思って、ここに記録を。これです。（手帳を取り出す）

久美子　何を記録してあるんですか。

タヌキ　例えば、10月28日、天気晴れ。9時32分、鼻をかむ。パジャマA。10月29日、天気曇り。パジャマC。同日12時24分、来客。お見舞いだろうか。16時51分、鼻をかむ。

久美子　これは？

タヌキさんがやって来た。

タヌキ パジャマBです。

久美子 そうですか。

タヌキ こういう情報はカルテなどには記載されない種類の情報だと思います。だからこうして、私があなたの毎日を、記録として残しておこうと、毎日、この病室を見上げていたんです。

久美子 ……

タヌキ やっぱり気持ち悪いですよね。

久美子 いいえ。私のこと見てくれている人ってやっぱりいるんだなって思います。

タヌキ 大丈夫。私がずっと見ています。記録もここに残っている。大丈夫です。

久美子 そう言っていただけだと、とても嬉しいです。

看護師がやってきた。

看護師 (声のみ) おはようございまーす。

久美子 隠れて！家族以外は、病室に入ってはいけない約束なの！

タヌキ ええ。わかりました。

タヌキ、隠れる。

看護師がやってきた。

看護師 ダメじゃない、寝ていなくちゃ。

久美子 すいません。

看護師 はい、じゃ、これ。体温、測ってね。

看護師、体温計を久美子に渡す。

看護師 あれ？お姉ちゃんは？

久美子 何か、コウタ探しに。

看護師 あら、そう。まだ今日、会っていないな。

久美子 そうですか。

看護師 彼、結構、イケメンよね。将来、楽しみだわ。

久美子 そうですか？

看護師 今、いくつだったけ？

久美子 あ、23歳。

タヌキさんがやって来た。

看護師　じゃなくて、コウタ君。

久美子　ああ・・・3歳です。

看護師　一番可愛い時期じゃない。あと15年で18か・・・あ、何でもない・・・うふふ・・・

久美子　あの、外、出たらダメですか？

看護師　どうだろね。それは、またあとで先生に訊いてみて。

久美子　少しでいいから、春のにおいをかいでみたいんです。

看護師　そうだねえ。

計測の終わった音。

久美子　はい。(体温計を渡す)

看護師　・・・熱はないね・・・

久美子　よかった。今日は何だか気分がよくなって。

看護師　そう。じゃ、また後でね。

看護師、出て行く。

タヌキ、現れて、

久美子　よかった・・・見つからなくて。

タヌキ　コウタ君で言うんですかあ。お姉さんの息子さんですよ。

久美子　ええ、母は、私が3歳の頃亡くなったんですね。だからお姉ちゃん、気を遣ってくれて。私が寂しくないようにって。毎日、来てくれるんです。お父さんも、仕事、忙しいみたいだし。

タヌキ　ええ、ええ。

久美子　父は大学で働いています。鉱物っていうんですか？何だか石みたいなやつの研究をしているんです。

タヌキ　ほう、ほう。

久美子　娘の私には、いったい何がそんなに面白くて研究しているのか、さっぱりわかりません。

タヌキ　そうですか、そうですか。(と大ききうなづく)

久美子　興味あるんですか？

タヌキ　だって、謎がようやく解けたんです。あの方はたぶんお姉さんなんだろうなあとか、お母さんは、なぜ来ないのかなあとか、何をされている方なのかなあとか、想像は膨らむばかりで・・・病室を眺めながらあれこれ想像はしていたのですが、今、この瞬間、ようやく

タヌキさんがやって来た。

解明されました。

久美子 そりゃ、よかったですね。謎が解明されて。

タヌキ 感激です。

久美子 うん。

タヌキ ……でも、あの看護師さんに一言言えば、私なんてすぐにここか

ら追い出されたでしょう。変な人がいますって。なぜ、そうしなかつたんですか。

久美子 だって、もう少しお話ししてみたかったから。

タヌキ そうですか？

久美子 だから、お話ししましょうよ、ここで、ふたりで。せつかくだから、

楽しいおしゃべりを。

タヌキ そうですね、そうしましょうか。

どこからともなく、楽しい音楽が聞こえてくる。

タヌキ、その音にあわせ、ダンスを始める。

ダンスが終わる。

久美子 今日はとても気分がいいな。

看護師、やってくる。

看護師 あれ？

と、看護師、タヌキの方を指差し、近づいていく。

看護師 あれこれ……

久美子 ど、どうしましたか。

看護師 何だ……シミか……いや、ほら、この壁にシミがあるでしょ。

久美子 (タヌキのことじゃないとほっとして) ああ、ありますね。

看護師 (笑い出し) 思い出しちゃった。

久美子 どうしたの？

看護師 いやね、この間、サラダ買って食べたんですけど、ドレッシングあるでしょ？こうやって両側を指で持って、半分にパキって折るやつ。

久美子 ああ、ありますね。

看護師 それでなんか妙に硬いから、折れなくて、おかしいなあと思って

タヌキさんがやって来た。

自分の方に向けて力入れたら、その瞬間にパキって折れて、ドレッシングが、イタリアンだったんだけど、顔と後ろの壁にべちゃーって飛んでね、もう大変だったんですよ、ドレッシングが。だいたい何で最近、コンビニのサラダ、ドレッシングが別売りなわけ？そう思わない？だって、サラダにはドレッシングがつきものでしょう？それは例えば、太陽は東から昇るとか、ルート2は無理数だとか、海の水は塩辛いとかと同じで、サラダにはドレッシングでしょ？なんで初めからセットでつけておかないのかしら。もし買い忘れてもしたらどうするのよ。さあ食べようと思ったらドレッシングがないだなんて！悲劇よ、悲劇。シェイクスピアも顔負けよ。自慢じゃないけど、私、自炊なんてほとんどしないから、せめてサラダだけは毎日食べようって、これでも気を使ってるの。家じゃお湯を沸かすくらいで、台所なんてほとんど使わないし、第一、忙しすぎるのよ。夜勤だって週に2回あるし、休みの日はほとんど寝て過ごすし・・・気がつけば夜で、ああ今日もどこにも出かけなかったなって落ち込んだりする。ここだけの話だけど、実は・・・家の冷蔵庫に、いつ買ったかわからないチーズがひとつ入っているの。もう怖くて見て見ないふりしているんだけど、処分しようとは思ってはいらんんだけど、だけどつい見て見ない振りをしてしまって、そのたび、何て私は弱い人間なんだろうって、いったい、いつになったら、冷蔵庫の中のチーズにこの私は向かい合えるんだろうかって、夜寝る前に、ひとり寂しく物思いにふけることもある。ストレスは溜まる一方で、つい食べることで解消しちゃうの。

久美子
看護士
わかってもらえる？

久美子
看護士
（笑っている）高城さんは、寮にお住まいですか。

ええ、そうよ。朝起きて、着替えて、そのまま病院来て、仕事して、帰って、サラダ買って、シャワーして、寝るの。

久美子
看護士
なかなか、タイトな日常ですね。

そう。タイト過ぎて、男性と知り合う暇もありやしない。

久美子
看護士
あはは。

あはは。・・・あとで先生、説明に来るから。

久美子
看護士
いやだな、あの検査。

我慢、我慢。

久美子
看護士
だって痛いんだもん、あれ。

看護士
治さなくちゃ。

タヌキさんがやって来た。

久美子 (看護師の顔を見て)
看護師 なになに。
久美子 なんでも。
看護師 ……じゃ、また後でね。
久美子 はあい。

看護師、出て行く。

タヌキ 実はこちらもいるんですよ。
久美子 ドレッシングですか？
タヌキ ケチャップです。
久美子 ああ。
タヌキ マスタードも。
久美子 ホットドック！
タヌキ いえ、フランクっていうんですか？ソーセージ。
久美子 そっちなか。
タヌキ フランクって、どういう意味でしょう。
久美子 フランクって、フランクフルトって言うんですよ。
タヌキ フランクフルト、そうですね。
久美子 だったら、あれですよ、地名ドイツの。
タヌキ そっか。ドイツといえば、ソーセージですものね。
久美子 でしょ？
タヌキ 行ったことありますか？ドイツ。
久美子 ないです。あります？
タヌキ ないです。
久美子 そうですか。
タヌキ というか、海外には一度も行ったことはありません。
久美子 そう。私が行ったことがあるのは、ハワイ、アメリカ、あ、ハワイもアメリカですけど、一応、アメリカ本土って意味です。それからカンボジア、韓国…あと、オーストラリア。
タヌキ いろいろ、行かれたんですね。
久美子 オーストラリアは中学の時の修学旅行で。ハワイは、お姉ちゃんの結婚式。アメリカは、高校生のとき、ホームステイで。カンボジアはアンコールワットに。どうしても行きたくて、連れていってもらったんです。
タヌキ どうでした？アンコールワット。

タヌキさんがやって来た。

久美子 よかったですよー。やっぱり実際に行って見ないと分からないこと
って、たくさんありますよね。

タヌキ あと、韓国だ。

久美子 ああ。韓国は二十歳のころ。

タヌキ ご家族で？

久美子 いえ、まあ、男の人と。

タヌキ それはそれは。その方とは今？

久美子 別れました。韓国から帰って一ヶ月くらいして。今考えると、最後
の旅行でした。

タヌキ 失礼しました。

久美子 いえ、いいんです。

タヌキ それは、その、旅行が原因だったんでしょうか。ほら、韓国って、
辛いものがありますでしょ？キムチとか。食べるものって大切で
すから、辛いものが苦手だったとか。

久美子 いえ、辛いものは二人とも大好評で、だからその旅行のせいじゃな
くって、やっぱりそういう運命だったんでしょうね。

タヌキ 運命ですか。

久美子 だけど内緒のつもりが、父親にバレちゃってすごく怒られました。
そりゃ、結婚前の女性ですからね。男性と二人でご旅行というのは、
特にお父さんはあまりいい顔、しないでしょ。

久美子 やっぱりそういうものですか。

タヌキ そうですよー。

久美子 私もめずらしく反省しました。きちんと説明すればよかったなっ
て。

タヌキ そうですね。

久美子 タヌキさんは、そういう人、いないんですか？

タヌキ そういう人という？

久美子 奥さんとか、恋人とか。

タヌキ ・・妻がいたけど、出て行きました。

久美子 そうですか。

タヌキ 子供はもう、小学生になるはずですよ。

久美子 お子さんもいるんだ。

タヌキ ええ。

久美子 お一人ですか。

タヌキ はい。女の子です・・すいません、こんな話し。

久美子 いえ、訊いたのは、私の方ですから。

タヌキさんがやって来た。

タヌキ ちょうどこのくらいの季節でした。冬が終わって、春になろうとするこの季節です。家に帰ると誰もいない。よく見ると、机の上に一枚のメモがあつて「出て行く」と。

久美子 突然？

タヌキ はい。

久美子 それまでそういう話は一度も？

タヌキ ええ、一度も。

久美子 そんなことつて・・・

タヌキ あるんですね。まるでドラマか何かを見ているかと思いました。

「出て行く」はないですよ。まあ「探さないでください」ってなかつただけ、よかつたのですが。

久美子 そうなんだ。

タヌキ それ以来、子供とも会っていませんし、いったいあの時何が起つたのか。

久美子 今も連絡は？

タヌキ ありません。どこで何をしているのか、元気にしているのか、全然わかりません。

久美子 そうなんですか。

タヌキ 想像はつくんです。小学生の子供がいて、女一人で生活していくのはなかなか大変ですからね。

久美子 誰か他の男の人が一緒にいたんだ。

タヌキ ええ。それしかないと思います。

久美子 ひどい！タヌキさんの他に好きな人ができたんだね。

タヌキ たぶん。それならそれで、黙って出て行かないで、話せばよかつたのにね。きちんと。

タヌキ そうですよ！私もそう思います。

久美子 味方です。断固、味方、私、タヌキさんの。

タヌキ ありがとうございます。

久美子 そっか。だからあの公園で暮らし始めたんだね。奥さん出ていちゃつて、ひとりぼっちになつて。

タヌキ まあ、色々複雑なんですけど、でも私の場合、仕方なくというよりも、むしろどちらかと言えば、進んで裸になつたというか、いや、例え話ですよ。決して、服を脱いだわけでは。

久美子 わかりますよ。

タヌキ それでね、まあ何というか、色々失つて、ひとりになつて、何もな

タヌキさんがやつて来た。

い場所で、空を見たり、星を見たりしてね、これまで自分は何をしてきたんだろうかって、思ったんですよ。ただ、がむしやらにやってくる、脇目もふらず、遠回りもせずにやってきた。それがベストな人生だと思っていた、疑いもせずに生きてきました。そんなとき、あなたに出会った。この病院の存在を聞いた。色々な人が、色々な人生を歩いて、ここに行き着いていると思うと、何となくですけど、自分が何をやらべいいのか、どうすればいいのか、ぼんやり見えてきたような気がしたんです。それを希望と呼んでいいのなら、たぶん私にとって、はじめてはっきりと感じられた「希望」だったように思います。

久美子 希望ですか。希望。

タヌキ 何でかなあと思いましたが、分かりませんでした。

久美子 何について？

タヌキ 妻が出て行った原因というか、理由についてです。

久美子 そうだねえ、何でだろうね。

タヌキ なぜある日を境に、好きだったものが、好きではなくなるのでしょうか。気持ちの離れるのは、なぜでしょう。なぜ久美子さんはその方とお別れされたんですか。何か、理由のようなもの、あつたんですか。

久美子 それは催眠術を解かれたっていうのかな。ある日突然、お互いの心

タヌキ から、お互いがいなくなってしまったの。

久美子 恋は催眠術だと？魔法ではありませんでしたか？

タヌキ (笑って)魔法でもいいですよ。どちらでも。

タヌキ ありがとうございます。それはその、おふたりとも同時に、そのように思われたんでしょうか。

久美子 どうでしょうかね。気が付いたら、離れ離れになっていたんです。

タヌキ ……それがお別れってことなんでしょうか。久美子さんにとつて。

久美子 わかりません。私、一人としか付き合っただけじゃないから。

タヌキ 人数が多ければいい、ということではありませんよ。ようは受け取り方の問題ですから、分からない人には分からないし、分かる人には分かるんです。それが例え、一人だけだとしても。

久美子 そうですか。

タヌキ 久美子さんは、今、彼氏欲しいなあとか思わないんですか。

久美子 あんまり思わないですね。

タヌキ どうして？

タヌキさんがやって来た。

久美子 何ででしょう。きっと優しい気持ちになれないような気がするからかな。人に優しい気持ちになれないと、自分で自分のこと、嫌いになりますからね。

タヌキ なるほど・・・確かにそうですね・・・

今日子が戻ってきた。

今日子 (驚いたように、久美子の顔を見る)

久美子 ・・・・どうしたの・・・

今日子 ・・・・何かいいことあった・・・？

久美子 どうして・・・？

今日子 久美子の笑顔、久しぶりに見たから・・・

久美子 そう？

今日子 ええ。

久美子 きつとタヌキさんのお陰ね。

今日子 ・・・・タヌキ？

久美子 ええ、そう。

今日子 タヌキは人を騙すんじゃないかった？

久美子 そうなの？

今日子 違ったっけ？キツネだっけ。

久美子 コウタは？

今日子 ああ、何か熱っぽくって、

久美子 それは大変！

今日子 だから今日は、帰るね。

久美子 わかった。そばにいてあげて。

今日子 また明日来るから。

久美子 うん・・・

今日子 じゃね。

久美子 行かないで。

今日子 ・・・・

久美子 やっぱり行かないで。私のお姉ちゃんでしょ？

今日子 駄々こねないで。

久美子 いいじゃない、駄々こねても。私だって、そばにいて欲しいよ。コウタと同じように。

今日子 コウタはまだ3歳になったばかりよ。一人じゃまだ何もできない年齢。

タヌキさんがやって来た。

久美子 タカシさんをお願いしてよ。

今日子 仕事があるのよ。

久美子 仕事なんて早退すればいいでしょ。会社だって、子供が熱が出れば、ダメとは言えないはず。

今日子 だけれど、こうして私が見ていられるわけだから、仕事だってして
いないし。

久美子 それは、仕事だからって、押し付けられてるだけ。今の時代、男だ
って平等に世話をすべきもの。少しでも女性の負担を減らすべき
よ。

今日子 ……どうしたの？

久美子 だってお姉ちゃんはずっとそばにいるから、大丈夫だからって、
そんな風に私に言うけど、でも一番大切なのは、私じゃないでし
よ？一番大切なのは、自分でしょ？自分の家族と子供でしょ？

今日子 私じゃなくちゃダメなの！

久美子 ……

今日子 母親じゃなくちゃ、ダメなのよ。どうしたって、私じゃなくちゃ、
ダメなの。父親じゃダメなの。そういうことがあるんだよ。

久美子 ……
わかってよ。

今日子 私には、お母さんの記憶がないの。

今日子 ……

久美子 わからないよ、そんなこと言われても…

今日子 ……行くね。

久美子 ……ごめん。大丈夫、私、大丈夫だから。少しだけ、駄々をこね
たかっただけ…

今日子 いいの。そういう時だってある…

久美子 ……お姉ちゃん。
なに？

久美子 ありがとう。まだ私が小さい頃、料理も、洗濯も、まるでお母さん
みたいにやってくれて、自分のやりたいことだって、たくさんあつ
たはずなのに…ごめんね…お姉ちゃんが本当のお母さんに
なったこと、とっても嬉しかったよ。そしてとても誇らしい。

今日子 どうしたのよ…改まって。

久美子 本当に、ありがとう。

今日子 ちよつとやめてよ…何よ…

久美子 一つだけ、言っておきたいことがあるんだけどさ、

タヌキさんがやって来た。

今日子 うん。
久美子 私、韓国、旅行行ったけど、何もなかったから。私、まだ、その・・・男の人と、そういうこと、したことないから・・・
今日子 ・・・・うん、わかった・・・
久美子 そういうことだから。
今日子 ・・・・
久美子 また明日ね。
今日子 また明日ね。
久美子 ばいばい！
今日子 うん。

今日子、行ってしまった。

久美子 頭では分かるんだ。もちろん。熱が出たら、お姉ちゃんはそのばにいてるべきだし、それは私のことが大切ではないって意味じゃなくって、ごく自然の行動だってことは、もちろん頭ではわかるの。駄々こねたって、満たされるはずないって、頭でわかっているんだけど。
・・・・わかります。

タヌキ あのさ・・・

タヌキ はい・・・

久美子 ・・・・セックスって、

タヌキ え？

久美子 気持ちいい？

タヌキ ・・・・あ、あ、そ、その、何と言っていいか・・・

久美子 気持ちいい？

タヌキ ・・・・人によるんじゃないでしょうか。

久美子 一応、年頃の女の子だからさ、興味あってもおかしくないでしょ！

タヌキ そうですね、おかしくありませんね。

久美子 こんなこと、誰にも訊けないでしょ。

タヌキ ええ、まあ。ですが、私に訊くのも、どうかだと思いますけど。

久美子 タヌキさんしかいないんだから、答えて。気持ちいい？

タヌキ 私はその、男性なので、女性の感覚っていうのは、説明するのは難しいものがあります・・・

久美子 説明してよ。何が楽しいのか、どんな風なのかとか。

タヌキ ですから・・・その・・・

久美子 ・・・・冗談よ、冗談・・・

タヌキさんがやって来た。

タヌキ は？

久美子 ごめんなさい。冗談です。

タヌキ ……冗談か、そうですね。

久美子 ……私だって初めて会った人に、こんな質問、するわけないじゃないですかあ。

タヌキ そうですよ、そりやそうだ。

久美子 そうですよ、しないですよ。するわけ、ないじゃないですか。も

う…タヌキさんったら…何言っているんですか…もう…

タヌキ それである。

久美子 はい。

タヌキ どうお考えですか。だってほら、何か変でしょ？看護師さんだって、お姉さんだって、その私のことを、その、

久美子 ああ…

タヌキ 話す用意は、それなりにできてはいます。

久美子 タヌキさんはさ、

タヌキ はい。

久美子 今、何がしたい？

タヌキ 私ですか？そうですね…したいことですか…？

久美子 娘さんに会いたい？

タヌキ ハルカっていいいます。

久美子 ハルカちゃんに、会いたい？

タヌキ でも、もう二度と会うことはできないんです。この手に抱きしめることは、もうできないんです。

久美子 そんなことは訊いてないよ。会いたいの？会いたくないの？

タヌキ 会いたいです。もちろん、会いたいです。

久美子 会えなくて、苦しい？

タヌキ 苦しいです。

久美子 抱きしめられなくて、苦しい？

タヌキ 苦しいです。

久美子 そっか。それを私に聞いてもらいたくて、わざわざ来たんだね。

タヌキ ……違います。

久美子 じゃあ、なぜ来たの？

タヌキ それをこれから説明したいと思うんです。いいですか？少し長い話になるかもしれませんが…

久美子 どのくらい？

タヌキ 私の場合、2時間くらいでした。

久美子 私の場合って？

タヌキ 私のところには、ヤナガワさんという女性の人がいらっしやいました。そのときが、ちょうど2時間くらいでした。

久美子 原因を考えるの。なぜ私なのって。

タヌキ そうでしょう。まだあなたは若い。

久美子 原因が分からないって、これほど苦しいものなのね。まるでタヌキさんの奥さんが出て行ったことみたいに・・・原因が分からないことって、こんなに苦しいんだって。

タヌキ そうですね。確かに苦しいかもしれませんが。

久美子 海外にも二度と行けないんだ、結婚もできないんだ、子供も産めないんだあ、って思うと、そういう可能性のひとつひとつを残念に思うのね。具体的に思うの。だから、今の誰を見ても、その人が、その人の可能性のすべてに気づいてないんじゃないかって、それが悔しいの。何とかして、伝えたくなるの。わかるかな？

タヌキ 少し、

久美子 わかるかな。

タヌキ 少し。

久美子 もっと、色々なことがしたい！まだ死にたくない！何で私なの！

（窓に近寄り） どうして、あの人じゃなくて私なの？

タヌキ 久美子さん・・・

久美子 死にたくない！死にたくないよ。

タヌキ ・ ・ ・

しばし、間。

久美子 その話は楽しい？タヌキさんが話そうとしているお話。2時間、かかるってお話。

タヌキ 楽しいかどうかは、その人によると思います。楽しいって思えば楽しいし、悲しいって思えば、悲しい話になります。でも私は、なるべく楽しく聞いて欲しいから、ずいぶん練習してきました。話す順番も、話すスピードも、抑揚のつけかた、単語の選択、声の大きさ、適切な身振り手振り、繰り返し、練習してきました。

久美子 ・ ・ ・ありがとうございます。

タヌキ できれば、今度、久美子さんが話す時の参考にしていただければと思います、

タヌキさんがやって来た。

久美子 私も話すの？

タヌキ ええ。人は誰もがいつかこの話を、誰かに伝えなくてはならないのです。それがいつになるかは、また別の話ですが。

久美子 へえ。少し楽しみになってきました。

タヌキ よかった。そう言っていただけだと、タヌキは何だか、とっても嬉しいです。

久美子 いえいえ、こちらこそ。私のところに来てくれて、よかった。発見してくれて、ありがとうございます。

タヌキ ありがとうございます。

久美子 それじゃあ、お願いします。お話、聞かせてください。

タヌキ わかりました。

男、座って、ノートを広げる。

どこから話し始めようか悩むが、意を決したように、顔を上げ、久美子を見る。

久美子、タヌキさんの話を食い入るように聞く。

久美子の表情は、やわらかく、美しい。

暗転。

あかりがつく。

看護師が、一人たち、そのままの病室の片付けをしている。

ふと窓の外を見る。

そこには、平和そうな町並みが見える。

幕。

タヌキさんがやって来た。